

牧 と 鹿 狩

(まきとししがり)



『寛政七年小金原御狩之記図会』(興風図書館蔵)

この史料は、寛政7年(1795)3月に「小金牧(こがねまき)」で行われた、11代将軍家斉(いえなり)の「御鹿狩(おししがり)」の様子を描いたものです。

「小金牧」は、下総(しもうさ)台地内陸部に広がる、江戸時代幕府が直接管理していた野馬(のま)の放牧場です。初期の頃は、北は野田市中里から南は千葉市柏井まで広がり、荘内牧(しょうないまき)(上野かみの・下野しもの)、高田台牧、上野牧、中野牧、一本櫛(いっぼんくぬぎ)牧、下野牧という六牧から構成されていました。一年に一度、牧ごとに「捕込とっこめ(馬込まごめ)」の中に野馬を追い込んでとらえる「野馬捕り(のまどり)」が行われ、幕府に軍用馬として供給された他、民間の農耕用・運搬用の役馬として払い下げられました。

広大な牧に数多く生息していた猪・鹿・たぬき・野うさぎなどを陣立てて狩猟したのが「御鹿狩」です。武芸復興・士気の高揚を目的に、8代将軍吉宗が享保10年(1725)に行ったのをはじめ、おおがかりな御鹿狩は幕末まで計4回、小金牧でおこなわれました。下総の村々だけでなく近国からも大勢の農民が数日前から駆り出され、猪鹿を追い立てる勢子人足(せこにんそく)を強いられました。動物による農作物の被害が軽減されるという利点もありました。

近世前期の野田市域には、小金牧のうち「荘内牧」がありましたが、享保改革期(1730年頃)の新田開発を経て牧地が消滅し、荘内牧は廃止されました。牧に隣接した村々を「野付村(のつけむら)」といい、野馬捕りや鹿狩りの際には人足を負担する他、普段は牧を管理し野馬の保護にあたっていました。牧と村(里)との境には、野馬が里に入り込んで農作物を荒らさないよう、「野馬除土手(のまよけどて)」「野馬堀(のまぼり)」が造られました。野田市域にもところどころに現在も残されています。荘内牧が廃止された後も、他の牧からの野馬の里入りには、関宿地域までも悩まされていました。寛政11年(1799)頃、の野馬方代官岩本石見守(のまがただいかんいわもといわみのかみ)が農民の訴えを聞き、里入りする野馬を捕らえ遠くの牧へ放ってその難を除いた、ということで中里村と船形村には感恩塔が建立されました。市域には牧があった名残を、「槇ノ内(まきのうち)」(尾崎)・「上野馬込(かみのまごめ)」(花井新田)などの地字名にもうかがうことができます。

詳しくは...

- * 野田市郷土博物館編 1988 『野田と下総牧 江戸から明治へ』(野田シリーズ)野田市郷土博物館
- * 佐藤真 1980 「小金牧と岩本石見守」 『野田郷土史』歴史図書社
- * 青木更吉 2003 『小金牧を歩く』 崙書房出版

旧花野井家住宅
(国指定重要文化財)



市役所前の野馬除土手



岩本石見守感恩塔

(船形 香取神社)



(中里 愛宕神社)

